

第7章 摩多羅神についての特論・・・エロス神との関係

常行堂（じょうぎようどう）というお堂のある天台系の寺院に祀られている「摩多羅神（まだらしん）」は、仏教の守護神としては異様な姿をしている。

だいたい仏法を守る守護神としては、インド伝来の神々の姿をしているものがおおむね主流である。これらの神々は、もとはといえば仏教とは関わりのない「野生の思考」から生み出されたインド土着の神々で、象徴的に含蓄の多い姿をしているものである。ところが、常行堂の後戸の場所に祀られているこの神は、少しもインド的でない。さりとて中国的ですらなく、かといって日本的かと言えば、そうとも言いきれない。かつては天台寺院において重要な働きをした神であるのに、摩多羅神は謎だらけの神なのである。

拙著「女性礼賛」（2011年6月、新公論社、電子出版）の第8章第1節で紹介した摩多羅神の神像図（「摩多羅神の曼陀羅」）は、古くから伝えられているものである。まずそれをよく見てみよう。



中央には摩多羅神がいる。頭に中国風のかぶり物をかぶり、日本風の狩衣（かりぎぬ）をまとっている。手には鼓をもって、不気味な笑みをたたえながら、これを打っている。両脇には笹の葉と茗荷（みょうが）の葉とをそれぞれ肩に担ぎながら踊る、二人の童子が描かれている。この三人の神を、笹と茗荷（みょうが）の繁（しげ）る林が囲み、頭上には北斗七星が配置されている。この北斗七星に是非ご注目願いたい。

この奇妙な姿をした摩多羅神が、常行堂に祀られている阿弥陀仏のちょうど背後にあたる暗い後戸の空間に置かれている。この背後の空間から、阿弥陀仏の仕事、つまり阿弥陀如来の救済の働きを守護しているわけである。

どうです！ 後戸の神・摩多羅神って、面白いでしょう。



阿弥陀仏と摩多羅神の組み合わせは、非常なアンバランスなものをはらんでいるが、天台宗の中で発達した「本覚論」という哲学の運動では、とくにこの摩多羅神が選り出されて、重要な働きをおこなうことになった。その元祖がかの慈覚大師（円仁）である。

空海や最澄がそうであったように、円仁（えんにん）もほぼ完成された人格をもって唐に留学に行っている。今我々が言う留学生ではない。円仁が我が国に持ち込んだシナ文化についても、円仁という人物の感性を通して我が国に入ったということだ。ちなみに、円仁は、15歳で比叡山に登り、最澄に師事。44歳で入唐している。第3代目の天台座主である。

世界の三大旅行記というのがある。玄奘（げんじょう）の大唐西域記とマルコ・ポーロ

の東方見聞録、そして円仁の入唐求法巡礼行記（にっとうぐほうじゅんれいこうき）である。入唐求法巡礼行記は、元駐日大使ライシャワーが英語に翻訳し、研究を重ねて博士号を取ったことでも知られている。ライシャワーの思いは、今、ハーバード大学のライシャワー研究所に引き継がれ、精力的に日本文化の研究が行われている。

さて、慈覚大師が始めたこの哲学運動では、教えを弟子に伝達するのに、天台密教風の「灌頂（かんじょう）」の様式を採用した。そのとき、本覚論の中の一元論哲学の奥義を伝える灌頂の場を守ろうとしたのが、この神なのだった。摩多羅神はこのとき、暗い後戸の空間を出て、奥義が伝えられる場の前面に躍り出てくるのである。

この神の由来について、はっきりしたことはもうわからなくなっている。鎌倉から室町にかけて、比叡山を中心にする天台系の寺院で流行していた本覚論は、江戸時代に入ると「邪教」の烙印を押されて、書物を焼かれたり、仏具を壊されたりしてしまい、表だつての伝承はそれで絶えてしまったから、摩多羅神の正体についてもすっかり不明となってしまった部分が多い。きれぎれに語られてきたことをつなぎあわせてみても、なかなかこの神の実体には届かない。

とりわけこの神の本質に関わる問題、たとえば、どうしてこのような名前と異例な姿を持つ神が、天台宗のなかで一元論思考を徹底的に推し進めたラジカルな哲学である本覚論と深いかわりを持つことになったのかとか、猿楽（さるがく）をはじめとする芸能の徒たちが、自分たちの芸能の守護神である「宿神」とこの摩多羅神とは同体の神であるという考えをいやくようになったのかとか、この神の本質をめぐる問いに充分に答えた研究は、まだ現れていない。

摩多羅神は、芸能の神でもある。リズムの神だと私は思っている。本音の神。本音は本当の音と書く。本音とは、「本当のところ何やんね？」というわけだ。その神が摩多羅神である。

こうしたなかで、『異神』という画期的な中世思想研究の書物の中で、山本ひろ子の考え方が、いまのところこの問題にいちばん肉薄できている、と私には思える。

彼女はまず『溪嵐拾葉集（けいらんしゅうようしゅう）』（光宗（こうじゅう）著、1317～1319に成立）に記録されたつぎのような記事に注目する。

摩多羅神とは摩訶迦羅（マカカラ）天であり、またはダキニ天である。この天の本誓（ほんぜいと読む。仏に誓う言葉。）は「経に云う。もし私は、臨終の際その者の死骸の肝臓を喰らわなければ、その者は往生を遂げることは出来ないだろう」。この事は非常なる秘事であつて、常行堂に奉仕する堂僧たちもこの本誓（ほんぜい）を知らない。

ここにあげられているマカカラ天（マハーカーラ、大黒天）といい、ダキニ天といい、どちらも仏教風に言えば「障礙神（しょうそしん）」の特徴をそなえている。この神を心

をこめてお祀りしていれば、正しい意図をもった願望を成就するために、大きな力となってくれる。しかし、少しでも不敬のことがあると、事を進める上に大きな障害をもたらして、あらゆる願望の成就を不可能にしてしまうというタイプの守護神が、障礙神（しょうそしん）なのである。まあいえば「災いの神」だ。民俗学風にこれを言いかえれば、このタイプの守護神はまぎれもない「荒神（あらぶるかみ）」である。

しかもこの神はカンニバル（人食い）としての特徴ももっている。人が亡くなる時、摩多羅神＝大黒天＝ダキニ天であるこの神が、死骸の肝臓を食べないでおくと、その人は往生できないのだという。

往生とは、人が生前に体験した第一の誕生（母親の胎内からの誕生）、第二の誕生（大人となるために子供の人格を否定するイニシエーションを体験して、真人間として生まれ直すこと）に続いて、人が誰でも体験することになる「第三の誕生」を意味している。その際には、人生のあいだに蓄積されたもろもろの悪や汚れを消滅させておく必要がある。そうでないと、往生の最高である浄土往生は難しい。

ここでちょっとアドリブを入れておこう。私たちはよく「私なんかしょっちゅう、往生してますわ！」と言いますが、本来的にはこういう言葉の使い方がおかしいかも。しかし、往生していないけれど、往生したいと願う心がこもっているのかもしれない。私が思うに、「ひっくり返し」の思想であるのかもしれないということだ。

元に戻ろう。往生のむつかしいとき、この恐るべき神が登場するのだ。人の肝臓には、人生の塵芥が蓄積されている。そういう重要な臓器を、摩多羅神は臨終のさいに、食いちぎっておいてくれるという慈悲を示すのだ。カンニバル（人食い）とは人生からの解放をもたらす聖なる行為だ。そしてそれを導いてくれるのが、恐ろしい姿をもって出現するこれら障礙神（しょうそしん）たちなのである。

つまり、常行堂の後戸に立って、前面に立つ光の仏である阿弥陀を守護しているこの謎の神は、創造的カンニバルとしての特徴を隠し持った、人類の思考の「古層」からやってきた表現として、理知的な仏教にはとうてい理解不能の存在だと思う。摩多羅神が謎なのは、この神が自分の内部に複雑な重層性をかかえているからである。表面には、狩衣をまとって鼓を手に、いままきに音楽を奏でようとしている男の姿で描かれた摩多羅神がいる。この姿でいるときは、摩多羅神は本覚論の「煩惱即菩提（ぼんのうそくぼだい）」の思想を直接に現した、日本思想の「中世」をあらわしている。ところがこの摩多羅神の奥には、もう一人の摩多羅神がいる。この摩多羅神は大黒天やダキニ天の親しい仲間として、仏教の中にひそんでいる「野生の思考」に深くつながっていく存在なのだ。この新石器的摩多羅神は、狩衣をまとった中世の摩多羅神の内部に隠れて、不穏な波動をあたりに

放出している。この神の中には、折口信夫の言う「古代」が隠されているのだ。

そのような神が、いわば本覚論というその時代の先端的な哲学思考の、まさに「後戸」に立つ。とてつもなく古代的な思考が、もっとも新しい思考と、文字どおり背中合わせに立っている。古代思想と近代思想の融合。一元論的認識の重要性を改めて強調しておきたい。一元論の哲学は重要である。「ほんとのところは何やんね？」というわけだ。

では、どうして本覚論のようなラジカルな一元論の哲学が、摩多羅神に凝縮されている古代的ないし新石器的思考を呼び寄せることになったのか。

先述のように、「この新石器的摩多羅神は、狩衣をまとった中世の摩多羅神の内部に隠れて、不穏な波動をあたりに放出している。この神の中には、折口信夫の言う「古代」が隠されているのだ。ここではこの点について少し話をしておきたい。摩多羅神に凝縮されている古代的ないし新石器的思考とはなにか？

この点については、川村湊がその著書「闇の摩多羅神・・・変幻する異神の謎を追う」（2008年11月、河出書房）に詳しく書いているので、それをもとにできるだけ判りやすく説明する。正確さに欠ける点があるのはご容赦願いたい。天台宗には、玄旨灌頂（げんしかんじょう）という独特の儀式を秘密裏に行う一派があった。灌頂（かんじょう）とは儀式のことをいうが、頭に水をそそぎ、正統な継承者とするための儀式であるが、その儀式は独特のもので、私は、世界的というか宇宙的というか、その名の通り深遠な内容のものであると思う。玄旨（げんし）というのは深遠な道理という意味だ。

残念ながらこの一派は江戸時代に真言密教立川流の影響を受けて邪教扱いをされ、この世に存在しなくなってしまう。何故邪教扱いをされたかは以下において徐々に説明する。摩多羅神が邪教扱いにされた訳ではない。摩多羅神は今も天台宗の裏戸の神として祀られているし、真言密教では「理趣教」が今もなお大事なお経として唱えられている。それらを考えると、玄旨灌頂（げんしかんじょう）も正しい理解のもとに今に伝承されるべきではなかったと思う。しかし、こういうきわどいものは「命（いのち）の脳」と「知恵の脳」がうまくバランスしないと変な方向に行ってしまうのも事実で、真言密教立川流の影響を受けたとはいえ玄旨灌頂（げんしかんじょう）が邪教扱いを受けたのもやむ得なかったとも思う。

さて、玄旨灌頂（げんしかんじょう）がどういうものか、逐次説明しよう。玄旨灌頂（げんしかんじょう）では、まず師と弟子は数日前から沐浴（もくよく）し、浄衣を着て、

なぜ今玄旨灌頂(げんしかんじょう)を行うのかを述べるなど、おごそかに始まりの儀式を行う。

次いで、灌頂道場の前で香を焚き、香油を塗り、口をそそいで、幣帛(へいはく。神への捧げもの。本来神道の作法。)を捧げる。その後に道場に入るのである。道場内には、正面に先に示した摩多羅神画像、左右の壁には山王七社、天台八祖の画像、十二因縁図、十界図が掲げられる。

灌頂を受ける弟子とその師は、道場に入る時は笏(しゃく)を持ち、さらに左手に茗荷(みょうが)を持ち、右手に竹葉を持つ。これは先の摩多羅神画像における二人の童子が茗荷と笹の葉を持っている構図と同じである。茗荷は一心一念を象徴し、竹の葉は三千三観を象徴しているらしい。何事も一心不乱に取り組み、その経験から直観を養い、言葉では言い尽くせない多くのことを悟らなければならないということであろう。

道場の真ん中には、香炉や供え物が供えられている。師は左の壇に座り、弟子は右側の草座に控えている。師は摩多羅神の前で三礼し、法華経や般若心経を唱え、山王神や宗祖たちに拝礼し、それぞれの弟子への口伝(こうでん)に入っていく。口伝(こうでん)は天台密教の奥義を語る言葉であり、ここまでは誠に厳かなものだ。問題はこれからだ。

口伝の後、摩多羅神画像の三人、つまり摩多羅神本尊とその脇を固める二人の童子をたたえる歌を歌い舞うのである。「シシリシニシ」という茗荷童子の「リシト歌」と「ソソロソニソ」という竹葉童子の「ロソト歌」というらしい。これが問題であって、なかなか奥が深いのである。玄旨灌頂(げんしかんじょう)は、先にも言ったように、世界的というか宇宙的というか、その名の通り深遠な内容のものである。それがこの言葉である。言葉で言い尽くせないことを言葉で説明するにはどうすれば良いか。「リシト歌」と「ロソト歌」を一心不乱に歌うしかないのである。「シリ」はお尻であり、「ソソ」は女性器おそそである。つまり、こんな卑猥な歌や舞が玄旨灌頂(げんしかんじょう)のハイライトであり、師が弟子にこれが意味する宇宙の真理を伝えることがこの一派の秘伝となっているのである。

熱海の伊豆山神社には摩多羅神の祭りがあり、こんな歌が歌われているという(あやかしの古層の神・摩多羅神)谷川健一)。「マタラ神の祭りニヤ、マラニマイヲ舞ワシテ、ツビニツツミヲ叩カシテ、囃(はや)セヤキンタマ、チンチャラ、チンチャラ、チンチャラ、チャン」。ここに「マラ」「ツビ」は男女の性器である。

玄旨灌頂(げんしかんじょう)は、前述のように、本来、世界的というか宇宙的というか、その名の通り深遠な内容のものである。しかし、その深遠な内容が正しく理解されていないとこのように卑俗な取り扱いになるのである。こうしたところから、玄旨灌頂(げ

んしかんじょう) は、真言密教立川流の影響もあり、性欲の積極的肯定というか性愛の秘技というイメージが一人歩きしてしまうのである。

玄旨灌頂(げんしかんじょう) は口伝による秘技であり、本来外に漏れてはいけないものである。しかし、儀式の心覚えのためか、文章として残っているものがあるらしい。それが大問題であって、秘技は秘技として自分の本当の弟子にしか伝えてはならない。

理趣経というお経があるが、空海が中国から持ち帰った『理趣釈経』（『理趣経』の解説本）に関連して有名な最澄の借経（経典を借りる）事件というのがある。参考のためにそれを紹介しておこう。

天台宗の開祖である最澄は、当時はまだ無名で若輩の空海に弟子入りし灌頂を受けたのであるが、その後、天台教学の確立を目指し繁忙だという理由で自分の弟子を使って、空海から借経を幾度となく繰り返していた。しかし、『理趣釈経』を借りようとして空海から遂に断られた。これは、修法の会得をしようとせず、経典を写して文字の表面上だけで密教を理解しようとする最澄に対して諫（いまし）めたもので、空海は密教では経典だけではなく修行法や面授口伝を尊ぶことを理由に借経を断ったという。空海が断った理由は、この『理趣経』の十七清浄句が、男女の性交そのものが成仏への道であるなどと間違った解釈がなされるのを懼（おそ）れたためといわれている。

空海は、その後東寺を完全に密教寺院として再編成し、真言密教以外の僧侶の出入りを禁じて、自分の選定した弟子にのみ、自ら選んだ経典や原典のみで修行させるという厳しい統制をかけたが、その中にさえ『理趣経』はないといわれる。「理趣経」はそれほど誤解を受けやすい経典であるが、それと同じように、玄旨灌頂(げんしかんじょう) は万が一外に漏れたらとんでもない誤解を受けかねないという、まさに秘技なのである。

なお、摩多羅神画像の上には北斗七星が描かれているが、摩多羅神は「天なる神への信仰」（妙見信仰）とつながっているのである。私が、「玄旨灌頂(げんしかんじょう) は、世界的というか宇宙的というか、その名の通り深遠な内容のものである」という所以（ゆえん）である。

摩多羅神は卑猥なものと聖なるもの間に存在している。卑猥といえば卑猥、聖だといえば聖なのである。また、卑猥でもないし、聖でもない、誠に深遠な存在であるが、神とはまあそんなものではないか。「エロスの神」も全く同じであり、摩多羅神と同一の神だといえなくもない。摩多羅神は天台宗という特定の宗教に限っての神として存在していたが、エロス神は一般庶民に崇められるべき神である。

「祈りの科学」シリーズ（４）の第１章でも述べたが、ものごとには何ごとにも両面がある。光があれば陰もあるし、物があれば「モノ」がある。「モノ」とは心のこもった物のことである。物とは単なる物質のことだ。

私は「両頭截断（りょうとうせつだん）」とよく言っているが、これはそういうものごとには必ず両面があるので、それにこだわってはいけないということを言っている。「あなたは善人ですか？・・・そうですねえ。善人と言えば善人だし、悪人と言えば悪人ですね。善人でもないし悪人でもない。ああ、やっぱり私は善人です。」・・・という訳だ。哲学的には二元論というが、そういう二元論を超えた世界、つまり一元論的認識の世界、それが陰陽の世界である。両頭を截断した、つまり相対的な認識を超えた絶対的な認識（一元論的認識）の世界である。私たちは陰陽の世界を生きているし、またそのことを日頃から十分認識しておく必要がある。

私は「両頭俱截断一劍器倚天寒（両頭ともに截断して一劍天によってすさまじ）」という禅語を略して「両頭截断」と言っているのだが、その意味するところはきわめて奥が深い。摩多羅神を考える場合にも、エロス神を考える場合にも、少なくともこういう一元論的認識の重要性だけでも理解しておくことがきわめて大事だと思う。この「両頭截断」という禅語については第１０章で詳しく説明し、そのあとでプラトンの「エロス論」と摩多羅神との関係を詳しく説明する。プラトンの「エロス論」は論理的であるが、結果的には、禅僧がいうような結論になっている。『 エロスは偉大な神でかつ美しき者に対する愛などと考えるてはならない。そんな考えに立っていると、エロスは美しくもなければ善くもないことになる。したがって、美しくもないものは必然的に醜いとか、善くないものもまた同様に悪いとかいう風に考えてはいけない。』・・・という訳だ。ともかくプラトンの「エロス論」は凄い！ しかし、私にいわせれば、中途半端なところがあって、力不足の面がある。その原因は古代ギリシャの「エロスの神」が中途半端な神であるからだ。古代ギリシャの「エロスの神・ディオニソス」は、その後ヨーロッパに強い影響を及ぼす「アポロン」（理性の神）に負けて、次第にその影が薄くなっていくのである。理性や合理に負けてはならなかったのである。理性や合理の神「アポロン」に負けない神として、本来は、世界最強の神「シヴァ神」を「ディオニソス」の代わりに登場させなければならなかったのである。

子供は社会の宝である。プラトンの「エロス論」はそのことをいちばん訴えているのだ

が、その子供はどんどん悪くなってきている。非正常な子供がどんどん増えているのだ。出産後の育児も問題だらけではないか。例えば、蛍光灯は幼児に良い影響を与えないようだし、少し大きくなってのパソコンゲームなんてものはもってのほかだ。コミュニケーションがうまく出ない子供が増えているのではないか。これは西洋文明の勢だ。プラトンの「エロス論」が力不足なのだ。

日本の「ホト神さま」や摩多羅神など、さらにはシヴァ神をも視野に入れて、私たち日本人にもなじみ深い神さまとして新たな「エロス神」を創らなければならない。子供は社会の宝である。私たちは今こそ新たな「エロスの神」を祀り、正しい人性を歩む努力をしなければならないのではないか。

